

私だけの笑顔

1

休日の私はいつも、学校で撮りためた写真の現像と整理に追われている。

なにしろ毎日、時間さえあればカメラを構えているのだから、一週間分ともなるとかなりの分量だ。

昼休みは時間が限られているし、放課後は運動部を中心に被写体とシャッターチャンスに事欠かない時間帯だから、撮影が忙しくてゆっくりと暗室に籠もつていられる時間はほとんどない。

だから学校で現像するのは、特別な場合だけ。とびつきりのいい写真が撮れて、一刻も早くその出来映えを確認したい時に限られる。

例えば、あの時のような……。

私は一冊のアルバムを取り出すと、ぱらぱらとページをめくった。目的の写真はすぐに見つかった。

そこには、二人の人物が写っていた。校庭のマ

リア像の前で向かい合って立ち、タイを直している。

小笠原祥子さまと、福沢祐巳さん。

十年以上になる私の写真歴の中でも、三指に入る傑作だと自負している。

「祐巳さんはきつと、偶然だと思っているんだらうな……」

そう考えると、ちよつと可笑しくなった。

偶然通りかかって、これほどの写真が撮れるはずがないではないか。構図も、露出も、フォーカスも完璧なのに。

そう、単なる偶然ではない。

この写真はある意味偶然であり、ある意味必然である。

もちろん私は、祥子さまが祐巳さんに声をかけるなんて知っていたわけではない。

その意味では、偶然。

だけと……。

祐巳さんが写真に写っているのは、偶然ではない。

そう。私はあの日、祐巳さんがマリア様にお祈

りしている写真を撮りたいと思っていた。だから、祐巳さんが登校してくる頃を狙って待ち伏せしていた。

そこへ、予想もしなかった人物が現れたというわけだ。

私は開いていたアルバムを閉じ、別なアルバムを手に取った。高等部に進学してから撮った分だけでも、厚いアルバムが十冊以上になる。高等部に在籍している生徒の中で、これはという人物はすべて収まっているだろう。

そして。

注意して見ていくと、ある特定の人物の比率が不自然に多いことに気付く。

特別、美人というわけではない。

特別、スタイルがいいわけではない。

だけど、心惹かれる笑顔の持ち主。

やや小柄で、どちらかといえば幼児体型で、髪を二つに結んでいる。

彼女の存在をはっきりと認識したのは、高等部の入学式の日だった。

その日の私は、夢中で写真を撮っていた。中等部では、部活の時間以外でカメラを持ち歩くことなど許されていなかったから。

まあ、それをいっただら、高等部でも許されているわけではないのだろう。ただ、黙認されているというだけのこと。

（ああ、志摩子さんが一緒のクラスなんだ。ラッキー）

ファインダーを覗きながら、思わず心の中で手を叩く。

藤堂志摩子さん。

まるでフランス人形のようなとびつきの美少女ということで中等部の頃から有名だった彼女と、同じクラスになれた偶然に感謝しながら、シャッターを押す。

美しい。幻想的な一枚の絵のようだ。

志摩子さんを撮っているだけで、自分、被写体には困らないかもしれない。

そうやって、クラスメイトを中心にフィルムに

収めていくうちに、ふと手が止まった。ちょうどシャッターを押して、次の被写体にレンズを向けようと思ったところで。

慌てて、その人物をもう一度ファインダーに収める。

別に、これといった特徴はない。

背はやや小柄、どちらかといえば幼児体型。黒いリボンで、髪を二つに結んでいる。

志摩子さんのように、目を見張るような美人というわけではない。強いて言えば、まあまあ可愛いといったところか。

「福沢、祐巳さん……だったっけ」

お互い幼稚舎からずっとリリアンにいるのに、これまで同じクラスになったことはない。それでも十年以上同じ学校に通っているのだから、名前くらいは知っていた。

何故、手が止まったのだろうか。

何故、彼女が気になるのだろうか。

無邪気な笑顔で、隣にいる友達と談笑しているその姿に、とりたてて変わったところはない。

なのに、何故。

よくわからないまま、私は祐巳さんの姿を何枚かフィルムに収めた。

*

それからも時々……いや頻繁に、私は祐巳さんを隠し撮りした。

そして、気付いたことがある。

祐巳さんは本当に表情が豊かだ、と。

表情がくるくると変わって、見ていて飽きない。

何枚撮っても、同じ表情は二つとないほどだ

彼女は、考えていることが素直に顔に出る。

楽しい時には楽しい顔。

悲しい時には悲しい顔。

つまらない時にはつまらなそうな顔。

祐巳さん自身がどれほど表情を抑えようとして

も、周りの者には一目瞭然だった。

それでわかった。

だから、祐巳さんの笑顔に惹かれるのだ。

祐巳さんは、考えていることがそのまま顔に出る。だから、笑顔を見せるのは本当に楽しい時。

作り笑い、愛想笑い、そして本当の笑顔。それがはっきりと区別できる。

祐巳さんの表情は、そのまま信じていい。他の人のように、本音を隠して笑顔を作ることができないから。

だから、祐巳さんの笑顔は素敵なんだ。

演技ではない、本物の表情。それこそ、私をもっとも惹かれるもの。

だから私は、いつも隠し撮りまがいのことをする。

モデルの笑顔は、作ったものだ。どんなに素敵に見えても、出来上がった写真には満足できない。隠し撮りで偶然撮れた、本物の笑顔には敵わないから。

私はぼんやりと、アルバムのページを繰っていく。

何枚も何枚も、祐巳さんが写っている写真が出てくる。

特によく撮れていると思った写真を、本人にあげたときのことを思い出した。

一瞬、驚いたような顔をして写真を見て。それからにっこりと微笑んで「ありがとう」と、素敵な笑顔を見せてくれた。もちろんその表情もフィルムに収めたのだから、お礼を言いたいのは私の方だった。

そうして祐巳さんのことを観察しているうちに、一つ気付いたことがあった。

祐巳さんは、ロサ・キネンシス・アン・ブウトン紅薔薇のつぼみ、小笠原祥子さまのことが好きだ、と。

例えばほら、この、体育祭の時の写真。

列に並びながら、よそ見をしている。

視線の先には、長い髪をなびかせて走る祥子さまの姿がある。

心ここにあらずといった表情で、祥子さまに見とれている。

もちろん、祥子さまにはファンが多い。下級生に限らず。

大富豪の令嬢で、文句なしの美人で、成績もよくて品行方正。そしてロサ・キネンシス・アン・ブウトン紅薔薇のつぼみ。

まさに、完全無欠。真正銘のお嬢様。

だけど私にとっては、あまり魅力を感じない相手だった。

その表情が、本物に思えないから。

なんと言えばいいのだろう。

祥子さまの周囲には、見えない壁があるようで。常に、本心を隠しているようで。

その美しい笑顔も、作り物のように感じてしまう。

祥子さまは一見優しげだけど、実は意外と人付き合いの悪い人物だった。ロサ・キネンシス・アン・ブウトン紅薔薇のつぼみとしての責務はよく果たしているだろうが、個人的に

下級生に親しげに声をかけたりはしない。

そういったわけで、私にとっては決して魅力的な被写体とは言えなかった。もしも祥子さまが心

からの笑顔を見せたら、それはどんなに素敵だろう、と思つてはいたが。

*

そんな時に撮つたのが、あの写真だった。

自分でも溜息が出るくらい、いい写真だった。

祐巳さんのタイを直しながら静かに微笑む祥子さまは、本当にマリア様のように神々しく、美しかった。

そこにはなんの邪心も打算もなく、ただただ親切心から、ふと目に留まつた下級生のタイを直している。

シャッターを押しながら、私は少し驚いていた。

あの祥子さまが、祐巳さんの前ではこんなに素直に自然な笑みを見せるのだ、と。

祐巳さんが祥子さまと親しいなんて、知らなかった。まるで姉妹のようではないか、と。その後すぐに、それが誤解だったとわかつたのだが。

だけど写真を見ると、やっぱり祐巳さんと祥子さまはとてもお似合いで。

だから祐巳さんに頼んで、祥子さまに写真を文藝祭で展示する許可をもらおうと考えた。

そんなことを考えなければ、その後の祐巳さんと祥子さまの学園生活は、まったく違ったものになつていたのかも知れない。

私が、二人が姉妹スールになるきっかけを作った。

きっかけを、作ってしまった。

それまで祐巳さんは、数少ない姉スールを持たない仲間だった。そのことで、ちょっとした連帯感も感じていた。

なのに、私が祐巳さんに姉スールができるきっかけを作ってしまった。

そのことを、少しだけ後悔している。けどそれ以来、祐巳さんと祥子さまのツーショットを撮れるようになったことは嬉しい。

私はいつたい、祐巳さんのことをどう思っているのだろう。

ただのクラスメイト？

単なる、魅力的な被写体？

それとも何か、特別な感情を抱いているのだろうか。

例えば、恋愛感情とか？

実をいうと、わたしはこれまで初恋も経験したことはなかった。そういう意味で誰かを好きになつたことはない。少なくとも、自分でそう意識したことは。

だけど祐巳さんが、私にとってなんらかの「特別な存在」であることは確かだ。

それでは私は、祐巳さんにとって特別な存在なのだろうか。あるいは、そうなりたいと思つているのだろうか。

少なくとも、祐巳さんともっとも仲のいい友達のうちの一人ではあるだろう。文化祭の一件以来話をする機会も増え、相談を持ちかけられるようにもなつた。

そして私は、そのことを嬉しく感じている。

誰かを特別な存在と考えること。その相手にとって特別な存在になりたいと思うこと。それは、恋愛感情とどこが違うのだろうか。

恋愛経験のない私には、よくわからない。

……それに。

祐巳さんにとって一番大切な、特別な存在は他

にいる。

私はそのことを、少し悔しく感じていた。

ある日の放課後。

写真の束を抱えて廊下を歩いていた私は、角を曲がったところで前から来た人とぶつかった。

持っていた写真が、ばらばらと床に散らばる。

「ああ、ごめんなさい」

「あ、すみません。祥子さま」

そう。ぶつかった相手はよりにもよって祥子さまだった。祥子さまは屈んで、落ちた写真を拾ってくれる。

その手がふと止まった。

「……もし良かったら、この写真を焼き増ししてくださいませんかしら？」

一枚の写真をこちらに向けて言う。

「……ダメです」

私は一瞬口ごもって、気が付くとそう答えていた。

「それは……私自身、納得していない写真なので」

祥子さまが持っていた写真は、祐巳さんの上半

身のアップだった。いつものように楽しそうに笑っている。

「写真の善し悪しはよくわからないけれど、とてもいい笑顔だね。それだけじゃだめなのかしら？」

「……申し訳ありません」

確かにそれは、祐巳さんの最高の笑顔だった。

しかし私はその写真を撮った時、祐巳さんの隣にいた人物を意図的にファインダーから外してしまったのだ。

どうして、そんなことをしたのだろう。

やきもち、だろうか。その笑顔が向けられている相手に対する。

自分の気持ちがわからない。祥子さまと別れた後で、私は小さくため息をついた。

私は、祐巳さんの笑顔が好き。

ただで最高の笑顔が見られるのは、祥子さまと一緒にの時。

だから私にとって、祐巳さんの笑顔は嬉しくて悔しい。

私は、ジレンマに陥っていた。

「祐巳さんは、嫌いな人よりも好きな人の方がずっと多いんでしょうね」

放課後、校庭の掃除をしている祐巳さんの姿をカメラで追いながら、私は言った。

竹^{たけぼうき}箒を持つ手を止めて、祐巳さんがこちらを向く。

「そう、かなあ……？」

「じゃあ、はつきりと『この人は嫌い』って言う人はいる？」

そう訊くと案の定、首を傾げて考え込んでいる。思っていることがすぐ顔に出る祐巳さんだけど、不快そうな顔よりも楽しそうな顔をしている時の方が、比べものにならないくらい多い。

私が考えても、祐巳さんが嫌っている人間なんてちよつと思いつかない。

例えば、新聞部の築山三奈子さまのことは好きではないだろうが、「嫌い」というよりも「強引な取材が苦手」という表現の方が正しいだろう。

宿敵といってもいいはずの花寺の生徒会長の事

も、冬休み中に何があつたのか「思っていたほど悪い人じゃない」なんて言っていたし。

周りは好きなものばかり。そんな祐巳さんが羨ましい。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。はつきりそう言える自分の性格は嫌いじゃない。嫌いなものの前で作り笑いを浮かべているのはいやだから。

だけど、嫌いなものがないなら、いつでも心からの笑顔を浮かべていられるなら、それが一番いいに決まっている。

だから私は、祐巳さんを羨ましく思う。

祐巳さんが三年生になった時には、きつと立派な紅薔薇^{ロサ・キネンシス}さまになるだろう。

今の紅薔薇^{ロサ・キネンシス}さまとも、祥子さまとも違う。けどどみんなから好かれる、かつてないくらい親しみやすい生徒会長になるに違いない。

その時が楽しみだ。少々、威厳には欠けるかもしれないが。

「私のことは？」

ふと思いついて、何気なく訊いてみた。

「え？ もちろん、好きだよ」

にっこりと笑いながら、祐巳さんは応える。なんの邪気もないその笑顔を、私は正面からカメラに収めた。

私だけに向けられた、とびっきりの笑顔。

この写真は祥子さまにも見せないで、写真部の展示会にも出さないで、私だけの宝物にしておう。

あとがき

ん。

あまり見かけない「薫子さん×祐巳」ものなんですが……なんというか、自分で書いててもイマイチしっくりきませんねえ、こーゆー中途半端にシリアスなものは。一人称つても苦手だし。

やっぱり私は、壊れ系パロディに専念するべきでしょうか。「ちょっと意外なカップリングシリーズ」としては「祐麒×祐巳」なんて禁断ネタも温めているのですが。

壊れ系の新作の予定は、今のところありません。シリアスなネタは考えれば浮かんでくるけど、壊れネタは「天啓」なので(笑)。多分、新作が発売されれば何か思いつくと思うんですけど。

ああ、そうそう。今冬発行予定の紫姫さんのマリア様本に、ゲストで小説(壊れ系)を書いています。冬コミもしくは通販で入手可能の筈。

詳しくはこちらをご覧ください。

http://www.d6.dion.ne.jp/~siki_h/

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。